

根岸家文書 (2) 解説

文書名 武蔵国大里郡甲山村（埼玉県熊谷市）根岸家文書
成立年代 江戸時代（寛文期）から昭和時代
収録点数 2,245点（既公開分との合計6,448点）

(1) 甲山（青山）村・箕輪村について

甲山村（現熊谷市青山）は、大里郡の東南端、荒川の支流和田吉野川の南方に位置し、村内を熊谷往還が通る。古くは箕輪村（現同市箕輪）と一村で「箕輪甲山村」と称したが、元禄11年（1698）に分村して「甲山村」となり、明治元年（1868）に「青山村」と改称された。もと吉見郡で、寛永年間（1624～44）頃からは大里郡に属したとされる。村名は、村内に所在する甲山古墳（埼玉県指定史跡）に由来するという。

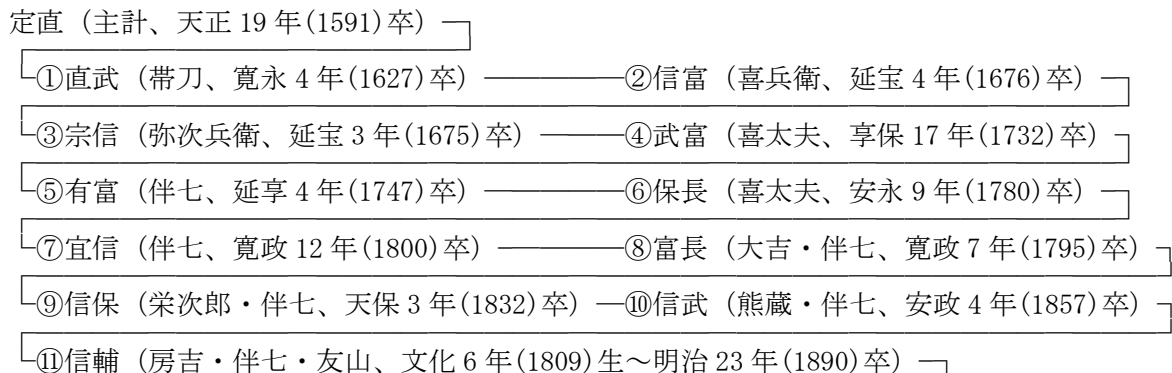
箕輪村は、甲山村の北に隣接する。分村以前の両村の石高は834石余、分村後は甲山村が350石余、箕輪村が484石余となった。なお、両村の石高・反別や領主及び明治時代における所轄県の異動については、埼玉県立図書館編・発行『近世史料所在調査報告2 武蔵国大里郡甲山村 根岸家文書目録』（1967年、のち1984年に埼玉県立文書館編・発行として復刻。以下「既刊目録」とする。）の解説等を参照いただきたい。

(2) 根岸家について

根岸家は、武蔵武士熊谷直実の末裔で、所領であった比企郡根岸郷（現嵐山町根岸）から苗字を取ったと伝わる。戦国時代には松山城主上田氏の家臣となり、小田原北条氏滅亡後は一時上杉景勝に仕えたものの、慶長3年（1598）に景勝が会津転封となると致仕し、甲山の地に土着したとされる。

根岸家では、甲山土着後に土地集積を重ねて村内の地位を上昇させ、享保元年（1716）からは歴代当主が甲山村の名主を世襲、宝暦年間（1751～64）からは箕輪村の名主も兼帯した。家業は農業のほか、金融業、酒造業や荒川の通船業等、幅広く経営している。

当家の歴代当主はすでに既刊目録等でも明らかにされているが、戦国時代末から近代に至る概略のみ以下に摘記し、中興の祖とされる帯刀直武以降の代数を参考に併記する。なお、当家、特に根岸友山・武香父子とその関係者の系図は、後掲の[根岸貞子 2005]や[根岸友山・武香顕彰会 2006]等に詳しいため併せて参照いただきたい。



⑫武香（新吉・伴七・榎園、天保10年(1839)生～明治35年(1902)卒）

⑬盾臣（伴七、昭和15年(1940)卒）———⑭憲助（昭和5年(1930)卒）

近年では、幕末・明治時代に当主となった根岸友山・武香の「好古家」、すなわち古事物の愛好家としての活動が特に注目を集め、多くの研究が蓄積されている（近年の主な研究業績は、後掲の参考文献一覧に示した）。本目録には友山・武香に関わる文書が多く収録されているため、以下に二人の事績の概要を記す。

文政7年（1824）に16歳で根岸家当主となった友山は、家業や名主としての活動に従事する一方、荒川の治水事業にも尽力した。しかし、天保10年（1839）に治水に絡む川越藩への強訴（養負騒動）が起これると、その責任を問われ、同12年に江戸十里四方追放の処罰を受けた（安政6年（1859）赦免）。

一方、友山は屋敷内の離れに私塾「三余堂」を開設し、漢学者寺門静軒（1796～1868）や国学者安藤野雁（?～1867）らを招いて教えを請うた。特に寺門静軒は、以後友山と親交を深め、晩年を根岸家で過ごして当地で没した。また、友山は比企郡志賀村（現嵐山町）の水野清五郎（清吾）から甲源一刀流を学び、北辰一刀流を創始した千葉周作（1794～1855）とも交流した。自邸長屋門（熊谷市指定有形文化財（建造物））の西室に北辰一刀流の道場「振武所」を開き、江戸の玄武館から指導を受けている。

友山は長州藩や多くの尊皇攘夷派志士と交流を持ち、支援も惜しまなかった。文久3年（1863）には、清河八郎（1830～63）の呼びかけで組織された浪士組に自ら門人を率いて参加し、一番組小頭となった。その後、改組された新徴組でも一番組小頭を務めた。帰郷後は、執筆活動や詩作、古物収集等に注力した。

武香は、天保12年における父友山追放を受けて3歳で根岸家当主となり、嘉永3年（1850）に12歳で甲山村の名主に就任する。和漢の学問を三余堂で学び、安政3年には千葉周作の跡を継いだ玄武館の千葉道三郎から、北辰一刀流の兵法箇条目録を与えられた。

明治維新後、明治12年の郡区町村編制法施行以前には、青山村は第7大区5小区に所属し、武香はその戸長、後に副区長を務めた。明治時代初期、青山村の所轄県は大宮県、浦和県、入間県、熊谷県、埼玉県と変動するが、武香は県にも出仕し、入間県では租税課地券事務取扱、熊谷県では学区取締、埼玉県では学務担当・教育会議掛を務めたとされる。また明治3年（1870）には、弾正台の巡察属に任じられている。同12年には埼玉県議員に当選して初代副議長に選出され、翌年には竹井澹如の後を受けて2代議長となった。同27年には貴族院多額納税者議員に当選し、改進黨に属して活動していく。

武香は古事物への関心が高く、自ら幅広く古器物を収集したほか、生涯にわたり多くの好古家・学者と交流を持った。武香の好古家としての特に著名な功績としては、明治20年における吉見百穴（現国指定史跡）の発掘調査が挙げられる。また、『新篇武蔵風土記稿』等の出版事業も特筆すべきものである。

なお、現在まで根岸家に伝来した周知の文書群は、当館及び熊谷市に分けて寄託されている。この内、当館収蔵分の寄託・整理経過等については（3）で後述する。熊谷市寄託分は、熊谷市史編さん室が平成19年（2007）以降令和4年（2022）までに調査・整理を行ったもので、旧大里町で保管していた根岸家文書1,339点に、長年根岸家の番頭を務めた八木橋家に伝えられた根岸家関係文書、根岸家の短冊類を加えた合計3,692点の文書群となっている（後掲[水品洋介2023]参照）。この他、根岸家から国立国会図書館に寄贈された約950点の図書等は「青山文庫」として知られる（目録は帝国図書館編・発行『帝国図書館所蔵青山文庫和漢図書目録』（1935年）として刊行）。また、当館寄託の「林家文書」中にも、根岸家文書の一部が流入している。

(3) 文書の整理方針

根岸家文書は、当初、昭和 36 年（1961）に同家より埼玉県立図書館に寄託された。同 42 年には既刊目録が刊行となり、No.1～No.3934（枝番を含めた総点数 4,203 点）が整理・公開された。その後も昭和 44 年から同 63 年にかけて、数度にわたり追加の寄託を受けた。この間、同 50 年に埼玉県立文書館が独立機関として発足し、文書の管理が引き継がれた。追加寄託分の内、No.3935～No.5193 は平成 21 年（2009）に簡易的な追加目録が作成され公開に至るが、刊行は実現できていなかった。本目録には、この追加目録分に、今回新たに目録の作成を行った No.5194～No.6000 を加えた No.3935～No.6000（枝番含め 2,245 点）を掲載した。なお、本目録の編集に当たり、先述した追加目録の内容は文書原本と対照の上、適宜増補・改訂を加えた。

No.3935～No.6000 の文書は、本目録の編集に先立ち、すでに 1 点ずつラベルを貼付し、中性紙保存用封筒に入れ、中性紙保存箱に収め、保存庫に配架した状態まで整理されていた。原状及び整理作業の記録が十分に残されていないため詳細は不明であるが、これらは形態・内容等による一定の分類を経て再配列されたものとみられる。今回の整理では、原則としてこの配列と文書番号をそのまま踏襲したが、一部枝番の追加等を行った場合がある。

(4) 文書の分類と概要

『根岸家文書目録(2)』は、昭和 42 年（1967）に公開された既刊目録の追加分（第 1 次）である。

根岸家文書（第 1 次追加分）の全体像としては、近世文書が約 40%、近代文書が約 60%となっている。既刊目録との兼ね合いも考慮し、本目録では基本的にその分類を踏襲した。「Ⅰ 近世文書の部」及び「Ⅱ 近代文書の部」の分類項目がこれに当たる。ただし、今回の追加分においては私信（書簡・葉書）が全体の約 50%と多数に上るため、別項目として「Ⅲ 書状の部」を設けた。この中には、『新編埼玉県史 資料編 12 近世 3 文化』（1982 年）で「根岸友山家あて書翰」として掲載されたものも含まれる。ただし、形式としては書状であっても、一般文書の部の分類に含めた方が適切だと考えられるものは、内容に基づいて近世文書若しくは近代文書として分類した。分類による文書群の概要は、下記のとおりである。

なお、No.1～No.5193 は「根岸家文書」として平成 18 年（2006）2 月 28 日に熊谷市指定有形文化財（古文書）に指定されている。また、ピーボディ科学アカデミー代表エドワード・シルベスター・モースより送られた土器片寄贈に対する感謝状及びその関連資料（No.5256-1～3）は、根岸家所蔵のモース直筆画等とともに、平成 27 年 11 月 27 日付で熊谷市指定有形文化財（歴史資料）「E・S・モース関連資料」として指定されている。

I 近世文書の部

近世文書の部は 747 点で、今回公開分の約 33.3%を占める。第 2 分類として、「A 支配」「B 土地」「C 年貢・諸役」「D 村況」「E 村政」「F 戸口」「G 水利・治水」「H 農業」「I 諸産業」「J 交通」「K 商業・金融」「L 社会・文化」「M 家」「N 雑」を設けた。以下、特筆すべき項目をいくつか挙げる。

既刊目録では、「A 支配」は条目・触書・廻状、御用留、一揆、鉄砲、救恤・助成、夫食・貯穀・郷蔵、積穀・積金、鷹場、「B 土地」は村高帳、検地帳、持高、井堀・堤敷、名寄帳、小拾帳、高反別帳、高書小前帳、御林、山番、地境、入会、耕地絵図、「C 年貢・諸役」は年貢割付、年貢割合、年貢都合、先納割合、年貢皆済、高役銭、先納割合、廻米上納請取、物成、年貢入用、国役、検見、年賦、穀代、地頭入用、「D 村況」は村明細、村高地頭書上、村絵図・組合村絵図、「E 村政」は村役人、掛人給金、耕地番・堰番費、

村入用、村評定、村借、村方出入、盗難紛失等の関係資料で構成されていたが、今回これらの分類は総じて点数が少なく、「B土地」については該当する資料が1点もなかった。

「F戸口」は、宗門改帳、五人組帳、送入籍、相続養子、欠落等の関係資料となるが、本目録では婚姻・養子に関する落着一札・送一札等の送入籍関係資料がまとまっており、53点を数える。

「G水利・治水」は、既刊目録では普請組合・仕来書上、普請書上、普請目論見・出来形、普請願書・請書、普請議定、普請入用・治水出入入用、普請人足、堰場堤出入、普請組合堰場治水絵図、「H農業」は小作、小作証文、「I諸産業」は酒造、炭焼、「J交通」は通行手形、伝馬助郷・宿場助成、道法書、道路修理、河岸等に関する分類であったが、今回はこれらの資料も点数が少なく、「I諸産業」「J交通」は該当資料が1点もなかった。

「K商業・金融」は、質地、無尽、金銭貸借、金銭請取等に関する資料で構成されている。中でも、土地を担保とした質地手形が569点と多数に上る。年代は元禄13年(1700)～天保14年(1843)にわたり、出所の地主は甲山村・箕輪村の住人を中心として、大里郡高本村(現熊谷市)・中曾根村(同左)、比企郡大谷村(現東松山市)・平村(同左)等の周辺地域まで広がる。既刊目録掲載分にも同様の文書が多数含まれており、江戸時代における根岸家の土地集積の動態をより鮮明にする資料群といえよう。

「L社会・文化」は社寺・埋葬関係であるが、比企郡平村覚性寺の什物明細取調帳(No.4892)の1点のみであった。

「M家」は家事、家作、奉公人、金銭出納、諸記録等の関係資料であるが、友山・武香らが熱心に取り組んだ学問や剣術、好古家としての活動に直接関係するものも原則としてここに収めた。神田お玉が池の北辰一刀流千葉家の稽古場(玄武館)建設に係る材木調達関係の文書(No.4613～4618)は、根岸家と千葉家・玄武館の交流を示す資料として興味深いものである。

「N雑」には、書状等に付属しない漢詩の書付、根岸家が収集したとみられる幕末の世情や幕府の動向等に関する資料等、他の分類に含めがたいものを収めた。

II 近代文書の部

近代文書の部は903点で、今回公開分の約40.2%を占める。第2分類として、「A町村政」「B農業」「C林業」「D商業・金融」「E個人生活」「F雑」を設けた。以下、特筆すべき項目をいくつか挙げる。

「A町村政」は、布達・回章、選挙、吏員、村況、村絵図、戸数、戸籍、村税・地方税、土地、地番・地籍図、地券、地租改正、三斜野帳、学校、道路・交通、土木、社寺・埋葬、公用帳簿、願書・請届等の関係資料である。中でも学校関係資料が125点に上り、根岸武香が熊谷県の学区取締を務めたことや、青山学校の設立に関与したこと等が関係していると考えられる。

「B農業」は農耕・園芸や小作、「C林業」は山林関係の資料であるが、今回は点数が少ない。

「D商業・金融」は諸会社、酒造、穀類売買、金銭貸借、頼母子講等の関係資料である。特に、武州鉄道・東武鉄道・毛武鉄道・北埼玉鉄道・芸石鉄道・京都鉄道等の鉄道事業関係の資料が多くなっている。

「E個人生活」は、履歴、親族、金銭出納、資産調、家事、冠婚葬祭、貴族院等の関係資料であるが、近世の部同様、学問や剣術、好古家としての活動に直接関係するものも原則としてここに収めた。内容としては、武香が立候補した貴族院議員選挙や、当選後の議員活動に関する資料が比較的まとまっている。また、松浦武四郎や比企郡番匠村の小室元長といった著名な好古家や、前述したピーボディ科学アカデミー代表モースからの土器片寄贈に対する感謝状やその関係資料等、古器物をめぐる交流関係の資料も多い。武香が

心血を注いだ『新編武蔵風土記稿』刊行事業関係の資料も見逃せない。

「F 雑」には、近世の部と同様、書状等に付属しない漢詩・和歌の書付等、他の分類に含めがたいものを収めた。その中には、慶応4年（1868）に官軍に捕縛された友山・武香の赦免に動いた、有栖川宮家との関係を示す資料も含まれている（No.5285-1～3）。

III 書状の部

書状の部は595点で、今回公開分の約26.5%を占める。第2分類として、「A家族・親族」「B年賀状・暑中見舞」「C交際」「D雑」を設けた。以下、特筆すべき項目について述べる。

「A家族・親族」に分類したものは63点であり、友山から武香への書状や、友山の弟で寺門静軒の娘を妻とした三蔵（雲外）から友山らに送られた書状、武香から息子盾臣に送られた書状等が含まれる。また、友山の甥に当たる清水卯三郎、武香の妻直子の実家である八木橋家、親戚に当たる桶川の府川家、川越の北野家等から送られた書状もみられる。

「C交際」に分類したものは505点であり、交流を持った尊皇攘夷派志士、学者、好古家、政財界の著名人らからの書状が多く含まれる。寺門静軒や清河八郎から送られた書状は、一括してここに収めた。

<参考文献>

新井端「『朝日之舎日記』に見る山田衛居と根岸武香の交友」（『熊谷市史研究』10、2018年）

新井端「好古家根岸武香の文化活動とその交友—小杉楹邨手記『千とせのあき』から—」（『熊谷市史研究』11、2019年）

内川隆志編『好古家ネットワークの形成と近代博物館創設に関する学際的研究 III・IV』（2020・21年）

内川隆志編『人文資料形成史における博物館学的研究—根岸友山・武香旧蔵資料の研究と公開— I～III』（近代博物館形成史研究会、2022～24年）

内田満「天保期以降の根岸友山・武香父子の軌跡—二度の捕縛の顛末—」（『埼玉地方史』74、2018年）

大沼宜規「ある好古家のコレクション 根岸武香と青山文庫—「国立国会図書館デジタル化資料」搭載を契機として—」（『国立国会図書館月報』620、2012年）

熊谷市教育委員会社会教育課市史編さん室編・発行『熊谷市史調査報告書 第1集 青山根岸家資料報告 (1) —考古資料・古瓦—』（2015年）

國學院大學博物館編・発行『榎園好古図譜—北武蔵の名家 根岸家の古物—』（2024年）

埼玉県立文書館編・発行『大里地方の文書 友山と武香—青山根岸家文書の世界—』（1998年）

重田正夫「明治初期における武蔵の「好古家」根岸友山と武香—上中条出土の埴輪と黒岩村横穴群の発掘を中心に—」（『熊谷市史研究』6・7、2014・15年）

重田正夫「根岸武香の『新編武蔵風土記稿』刊行とその購入者」（『熊谷市史研究』9、2017年）

重田正夫「明治中期における「好古家」根岸武香の活動—吉見百穴・『新編武蔵風土記稿』・『史料通信叢誌』・集古会—」（『熊谷市史研究』15、2023年）

根岸貞子「根岸家の系図について」（『根岸友山とその子武香』大里町歴史研究会、2005年）

根岸友山・武香顕彰会編『根岸友山・武香の軌跡 幕末維新から明治へ』（さきたま出版会、2006年）

深澤靖幸「根岸武香収集拓本コレクション」（『府中市郷土の森博物館紀要』36、2023年）

三浦泰之「武蔵国の「好古家」根岸武香と松浦武四郎」（笹木義友・三浦泰之編『松浦武四郎研究序説—幕末維新期における知識人ネットワークの諸相—』北海道出版企画センター、2011年）

水口由紀子「根岸武香と利仁神社経塚」（『埼玉県立史跡の博物館紀要』9、2016年）

水品洋介「寄贈・寄託文書の紹介Ⅳ 胄山 根岸友憲家文書」（『熊谷市史研究』15、2023年）